

ぷれみあむ
premium
みにっつ
minute

第5集

長命寺へ向かえ！
の巻

☆ shiroa ☆

☆ 7 ☆ 長命寺へ向かえ！

カエルとハチマキをやっつけ、なんとなく自信がついた気がする。もしも追いつかれたら、“相手をやっつける”という選択肢が追加された。もはやあの二人に関しては寝首をかかれないう限り、恐くは無い。

車は順調に長命寺に向かっていった。ナビに従えばそう遠い所ではなく、十五分程度で着く。もし町中で信号につかまらなければもっと早く着くはずだ。距離としてはわずかである。

「ねえミユウちゃん、シューターに狙撃された話は、今でもハツタリだと思う？」

ミユウちゃんをちらりと見ると、眉間にしわを寄せて考えていた。

「あたしもそれについて考えてたの。本当に狙撃されて、何かしらの発信機を付けられたとしたら。GPSの発信機？ 受信機？ よくわからないけど、その機械が超小型だとして。狙撃してハヤトにつけることは可能なのかしら」

どうしても気になるのは、何かを当てられた感触があったことだ。

「今思い出しても、確かに撃たれた感じはあったんだよね。肩と足。今となっては右肩だったのか、左だったのか。足のモモだったか、スネだったか。イマイチ思い出せないんだけど」

「ええっ！ そこが大事でしょ」

「それが人間の記憶の曖昧なところってやつでしょ。推理小説みたいにすべての証言が正確で、謎解きの材料になるなんてこと、現実にはないんだから」

「甘いぞハヤト君。乱歩先生はその曖昧な心理を計算に入れて、名探偵明智小五郎に推理させているのだぞよ」

「そうなんだ。怪人二十面相とか、四十面相とか、あのシリーズだよ」

「そうだっけ？」

なんか情報が危ういな。

「どうも二発撃たれた気がする。けど、本当の銃じゃ無かった。空気銃で撃たれたのかな？ あまり詳しく調べたわけじゃないけど、別にBB弾のような弾が周りに落ちてた感じも無かったなあ。よしんばBB弾に発信機を詰め込んで俺に当てて、ほぼ九十九パーセントは弾けて周辺に跳んでくよ」

「普通ならね。けどそのシューターが凄腕だったら、ハヤトに当てて胸ポケットに入れるとかできたかも。ズボンのポケットに入れるとか」

肩に当てて、その弾みを利用してポケットに入れるなんて、どれだけの達人、超人の仕事なんだ。ほぼ漫画の領域である。

「でも当たった感触は胸じゃなく、肩と足だったよ。足に当てて腰にあるポケットに入れるとか、肩に当てて胸ポケットに入れるとか。無理じゃない？」

反動によっては有りうるかも知れないが、やはりその神技の技術は漫画の領域だ。

「無理よね。それにどんなに小さくても、ポケット調べれば出てくるわよね。さっき調べた時、確実に無かったわよ」

「確かに。俺も必死だったから、かなり小さな石つぶがポケットにあるのまで発見して、ポイッと捨てたよ、そういや。BB弾よりそれは小さかった」

車が信号待ちの間、あらためて俺はポケットに手を突っ込み、かなり念入りに調べた。しかしほんとうに細かな砂粒と繊維のかたまりが出てきたのみだった。

「無い。間違いない」

俺はもう一度撃たれたらしい状況のことを思い出した。一応あのとき周りを見渡したんだよな。その時にパチンコ屋が目について、こんな朝っぱらから仕事もせずにパチンコやってるやつがいるんだって呆れて……。

「あっ！ パチンコだ！」

ミユウちゃんも興味深げに上半身を乗り出し、俺に少し近づいた。

「え、パチンコがどうしたの?!」

「パチンコ玉が落ちてたんだ！ モデルガンの弾といえばいまやBB弾が主流だけど、その前は銀玉、つまりパチンコが使われていた！ 思い返せば俺のすぐ近くにパチンコ玉が落ちてたし。それで俺を狙撃したんだ！」

俺は自信をもってミユウちゃんの方を向いた。本日一番のりりしい表情をしたつもりだった。しかし俺を見るミユウちゃんの顔はどっちらけだった。

「体乗り出して損した。バカじゃない」

はあ？

「どうして？ 絶対そうだよ。絶対パチンコ玉で狙撃したんだよ！」

「もしパチンコ玉が正解として、そのパチンコ玉がどこにあるかが問題なのよ。パチンコ玉ってあまり詳しく比較したことないけど、多分BB弾より大きいと思うんだけど。そんな大きさのモノが、どのポケット探したってないじゃない。それが分かっても意味がないのよ」

せっかくの俺のアイデアだったが、すぐに瓦礫のように崩れてしまった。しかし俺は未練がましくそこから推論を展開してみた。

「もしかしたらパチンコ玉に何かシールを貼っていて、そのシールを俺につけるために撃ったんじゃない？」

「シールも無かったわ」

「もしかしたらパチンコ玉にあたることで俺の体が化学反応を起こして人間GPSになるとか」

ミユウちゃんは氷のように冷たい目をして俺に言い放った。

「それ、本気で言ってるの？ ふざけてるのよねえ」

そのミユウちゃんの目に戦慄した俺に、黙る以外に選択肢は無かった。

車は順調に長命寺についた。俺の車のナビにしては賢く、きちんとお寺の駐車場にナビゲートしてくれた。駐車場から急な階段を上り、本堂へ向かうようだ。

「ついたね。よし、弁慶なる人物に会いに行こう！」

弁慶は仲間だ。きっと俺たちを助けてくれる。しかしミユウちゃん表情は浮かない。まだ怒っているのだろうか。

「弁慶さんって、本当に助けてくれるのかしら」

「少なくとも仏門に下っている人だ。信頼できる」

「パンダマンの知り合い、というだけで十分信頼できないわ」

……確かに。パンダマンはまだ完全に味方だとは言いきれない。いや、むしろカエルやハチマキの仲間であることがわかった。何か理由があり俺を逃そうとしてくれているが、だからといって味方ではない。

「じゃ、これは罠だって思うの」

「わからない。けど、その可能性はあるってこと。……とはいっても、こうやってあたしもついて来てるのは、本当に助けてくれるかもって期待してるからなのよね。一縷の望みでも、今はここに希望を託したい」

「なんかミユウちゃん、詩人みたいだね」

ミユウちゃんはにこりと笑った。

「えへん。やっと気付いた？ あたし、ポエラーなのよ、ブログでも結構人気あるんだから」
ちょっと元気が出たみたい。よし、元気を出して階段を上ろう！

「ははは、そうなんだ。俺も今度読んでみるよ、新しい携帯を買ったらね。さて、弁慶に会いに行くか！」

階段は一段一段が妙に高く感じた。上にあがるにつれ、胸の鼓動も強くなっていった。

清潔に掃き清められた境内の真ん中で、ポツンと大男が竹箒を持って立っている。静かに、静かに。大男は境内を掃き清めていた。これだけ綺麗だと足を踏み入れるのはばかられる。そんな気配を察してか、大男はこちらを向くと、大声で話しかけてきた。

「なにがしかお尋ねか」

それに答えるように、「あの～」と言いかけると、さらに声が聞こえてきた。

「む、そなたは……。なるほど、委細承知つかまつった。それがしの名は弁慶と申す。隼人どの、こちらへ参られよ」

なんで俺の名を知っているんだ？ それよりなんか、今までへんちくりんな人間ばかり相手にしていたのに、今度は妙にカタイ相手で調子が狂う。

ぴんと張り詰めた空気は仏の道を志す者だからだろうか。不逞は許さないだろう。敵には感じない。それならば、安心して近づいてもよさそうだ。

俺は境内へ入った。扇型に弧を描いて掃き清められた地面、どうやって掃けばこれだけ綺麗に掃けるのだろうか。一步足を踏み入れるだけでその幾何学模様は崩れてしまった。何も悪いことをしているわけではないのに、なんだか罪を犯した気分になる。

「何も案ずることはない。気にせず此方へまいられよ。地の模様はいずれ風のいたずらで乱れるものでござる。かすかな力で乱れるからこそ、それがしが常に掃き、清めるのでござる」

俺のそんな過剰反応を察してか、弁慶は大声で言った。なんか心の中が見透かされているようだ。ミユウちゃんはわりと気にせず歩いている。

「わあ弁慶さん、すごいね。ひとりでコレ綺麗にしたの?!」

「左様、これがそれがしの仕事ゆえ」

紺色の作務衣が似合いすぎるほど似合っている。近づき、さらに驚いた。身長は二メートルあるかも知れない。ただ身長があるだけでなく、がたいもしっかりしている。確かに、もし渾名を

つけるなら、弁慶が最も適しているだろう。

「ねえ、どうして俺の名前を知ってるの？」

「友人のパンダマン殿より連絡があった。隼人なる人物がこちらへ参るゆえ、助太刀願いたいと。パンダマン殿との旧知の恩顧に報いるため、承知つかまつた」

全く、このつながりが読めない。弁慶の年の頃は五十路前だろうか。こういう修行で鍛錬をしている人間は、老けても見えるし、若くも見える。年齢不詳だ。こういう浮世離れた人間が、カエルやパンダマンと知り合いなのだろうか？

「あの、カエルの格好した男とかも友達なんすか？」

「かわずとな？ そんな恰好をした奇天烈な男がいると申すか」

意外とパンダマンって見た目は普通の人なのかなあ。

「うん。それとハチマキを頭にまいたやつに追われてたんだ。で、パンダマンから時々携帯に連絡が入って、ここに来たら弁慶さんが助けてくれるって」

「それは承知しておる。安心いたせ。なにがしを襲うものはそれがしの武で退けてござろう」

すごく頼もしい。そこでミユウちゃんが質問をした。

「でも、お坊さんって戦うの？ 神に仕える人間が暴力って、なんかイメージわかないんだけど」

弁慶はそれを聞いて快活に笑った。

「はっはっはっは。娘、滑稽なことを申すな。力とは相手を滅ぼすだけではござらん。守り生かすためのものでござる。力の使い方を誤れば、それは野蛮となろうが、それがしはその為に日々鍛錬を積んでいるわけではござらん。寺には弱き民が時折駆けこんでくることもある。そんな折にはそれを追いかける賊共を蹴散らす必要もある。そういう時の為の武でござる」

俺も思い出したうんちくを弁慶に乗じて語った。

「そうだよ。もともとお寺とか教会というのは、祈りの為だけの場所じゃなく、武を鍛える場所でもあるんだよ。その理由は、やはり守るためだと思うんだけどね。少林寺拳法ってあるじゃない。あれも修行僧が身につける武術じゃない」

「おお、確かに。あたし、サモハン・キンポー大好き。でぶごん、でぶごん」

「娘、随分古いものを知ってござるな」

なんか俺にはよく分からない。

「でぶごんは分かったけど、それってやっぱ中国だけの特有のものじゃない？」

「そんなことは無いよ。例えばキリスト教の十字軍。教会だけど重装備の軍隊を持ってたわけ。あとゲームのファイナルファンタジーにモンクって出てくるんだけど、西洋の僧兵のことだよな」

「僧兵とはまさに武蔵坊弁慶殿のことではござるな」

「へえ、わりと世界中でお寺？ 神社？ 教会？ ……まあいいわ。それと武術との関係ってあるものなのね」

「そういうことでござる。問題はその武をどう使うか、が問われるのでござる。宮本武蔵殿も申しておられたが、殺人剣ではあってはならぬ。活人剣であらねばと」

こんな大男で、これだけ立派な話をする人が敵なわけがない。少し前の緊張は解け、俺は安堵に胸をなでおろした。そして、どういうわけで俺を助けようとしてくれたのかわからないが、パンダマンもどうやら頼れる仲間と考えてもいいらしい。

「ところでパンダマンってどういう人なの？」

俺は率直に訪ねてみた。

「パンダマン殿か。彼は実に立派な御仁でござる。思い出すは中学生のころ。まだそれがしの身の丈も五尺ほどのちんちく坊主だったころのこととござる」

中学生で五尺。五尺っていうことは、約百六十センチくらいか。まだ当時は普通の背丈だったんだな。

「昼の休息時間で楽しみにしていたお弁当をいただくとう蓋を開けたところ、何者かにいたずらされた後がある。白い米粒の上に土がかけられておった。おおかた曲者の予測はついたのだが、まだ力のないそれがしは、ただただ涙を抑え悔しさを堪える他なかつたのでござる。そんな折、それがしに自分のお弁当を分けてくれた心優しき人がいた」

さすがに想像がついた。

「それが、パンダマンだったんですね」

どうやら同級生だったらしい。

「左様。パンダマン殿はそれがしに云った。いつか、あやつらより力をつけ、不逞な働きができぬくらいにしてやろうぞと。見返そうぞと」

……つまり、パンダマンもイジメられてたわけね。

「それよりパンダマン殿との朋友関係は未だに続いておる。これは生涯の友となろうな」

いい話なのだろうか。もしかしてこれは笑い話の部類ではないだろうか。まあ、いいか。

「へえ、いい話ね。パンダマンっていい人じゃん！」

ミユウちゃん、すごくこの話に乗ってるみたい。少し前まであれだけパンダマン疑ってたのに、弁慶の言葉で随分信頼したもんだ。

「なるほど、パンダマンとの関係は分かりました。けど、弁慶さんはここでの仕事があるのに、本当に俺たちを助けてくれるんすか」

「勿論でござる。これより住職へしばしの暇乞いをお願いして参る。さすれば共に行動できるとござるよ」

おお、頼もしい！ 弁慶が共にいれば鬼に金棒だ。

「それはありがたいんですけど、本当に暇乞いなんてできるんですか？ お寺での修行とか、お仕事とか大丈夫ですか？」

「それがしは元々客分の居候ゆえ、お寺には関与してござらぬ。用心棒といえば用心棒のようなもの。しかしこの和平の世では物騒な駆け込みがあるでもなし。それがしの存在も使わぬ国の核兵器のような意義といえるかも知れぬ」

急に例えが現代的になったな。

「つまりお寺のお弟子さんとはまた違う立場で、住み込みのガードマンみたいな感じなんですね」

「左様。よって暇乞いとて住職はとめまいて。むしろ大喰らいの食い扶持が減る分、喜ばれよ

うて。はっはっはっは」

弁慶は実に快活に笑った。そこでミユウちゃんは素朴な疑問をぶつけた。

「ところで弁慶さん、あたしたちと一緒に来てくれるのはすごく助かるし嬉しいんだけど、あたしたち、次どうするか全く考えてないのよね。遠くに逃げるべきか、この辺で何かやるべきことをやっておくべきか。そのやるべきことも何だか想像つかないくらい」

弁慶はにやりと笑った。

「案ずるな。隼人殿らが次に向かう先は明確に決まっておる。パンダマン殿との対面ぞ。パンダマン殿との待ち合わせ場所へ、共に向かうのでござる」

「ついにパンダマンに会うのね！」

ミユウちゃんは手にぎゅっと力を込めて言った。

俺には電撃が脳天を打つ衝撃が走った。このハチャメチャな一日のはじまりは、パンダマンからの電話だった。その発端とも云えるパンダマンとの初対面は、新たな展開を予感させる。俺たちがつぎに何をすべきかの明確な方向性を教えてくれるかも知れない。

少し恐い気もする。けれどもいずれ会わなければいけない相手だった。このワケの分からない状況を、明確に説明してくれるのはパンダマンのはずだ。そのパンダマンと、ついに対面する時が来た。

「わかりました。では弁慶さん、俺たちはここで待ってますので、準備を整えてきて下さい」

「御意に」

弁慶は本堂へ去っていった。

俺とミユウちゃんは昼下がりのじりじり照りつける日差しを避けるよう、木陰に入りひたすら待っていた。

「遅いね」

ミユウちゃんは云った。もうゆうに二十分は経過しただろうか。そろそろ午後の一時になる。

「もしかしたら、止められてるのかもね」

ぼそっとネガティブな言葉がもれた。ミユウちゃんの顔がくもる。

「もしそうだとしたら、どうしよう?! 無駄にこうしてるだけでまたカエルさんたちがこっちに迫ってるかも知れないのに」

そう思うと気が気じゃない。

「気軽に本堂にも入っていけないからなあ。けど、よくよくやばくなったら駆けこもう。弁慶も言ってたけど、訳ありの弱い人間が駆けこむ場所でもあるもんね。守るのがそれがしの役目だって言ってたし。怒られることはないだろうと思う」

「そうね。もしやってきたらお寺に逃げよう」

そんな噂をしていたら、「いた！」という大声が聞こえてきた。声がした階段の方を見ると、そこには確かにカエルとハチマキがいた。

「いや、本当にしつこいね」

二人は息を切らしていた。境内に来るとすぐには追ってこず、呼吸を整えている。

「ねえ、今のうちに逃げる？」

俺はピンとひらめくことがあった。

「いや、これはチャンスだ。戦おう。まだカエルたちは階段のそばだ。突き落とせば結構なダメージになるはず」

「……死なない？」

そうか、死なせるとまずいな。

「じゃ、死なない程度に」

俺はカエルたちに向かって行った。まだ呼吸が整っていない、体力が不完全な状態に攻撃をかけよう。

「とお！」

俺はカエルを蹴り、階段から突き落とそうとした。が、そこでハチマキに抱きつかれ阻止された。

「ぼうず、ようやく捕まえたぞ！ 手間かけやがって！」

まずい、捕まった！ 俺は必至でもがいて振り切ろうとしたが、カエルもすぐに参戦してきた。カエルは俺の背をとり、腕を羽交い絞めにした。

駄目だ、動きがとれない。さっき公園でやっつけたことで自信をもってしまい、調子にのってしまった！

「そこの曲者、待たれい！」

そこで巨漢の弁慶が登場した。なぜか弁慶は相当大きな荷物を背に背負っていた。

「隼人殿に手を出すのは赦さん。どうしても引かぬなら、それがしが相手をしよう」

じりじりと弁慶は間合いをつめていく。カエルとハチマキは逃げようか逃げまいか、迷っている様子だった。さすがに俺を持って階段を降り逃げていくのは無理があると考えたようだ。

「お前には関係がないだろう！ これは俺たちの問題だ、門外漢は手を出すな！」

弁慶は「はっはっは」と快活に笑った。

「門外漢とは滑稽な。それがしパンダマン殿とは旧知の間柄。隼人殿をしかと守れと仰せつかっておる。義理により拙者の命に代えても守らねばならぬのよ」

カエルとハチマキは焦っているようだ。

「ええっ、そんなこと言われても……、ちくしょう、じゃ俺が戦う、お前はこのガキを連れて先に行ってくれて！」

ハチマキが前に出た。カエルは俺を連れて階段を降りようとする。捕まえる人間が一人になったので、俺は必死に抵抗した。弁慶ならハチマキを一瞬でやっつけてくれるはず。あと少しねばれば……。

そう思っていると絶望的なセリフを弁慶は吐いた。

「よし、よい心意気じゃ。そなたとそれがしでは体格差、修行の経験など大きく差がある。それは公平ではござらん。こちらに武器を用意している。好きな得物を使われよ」

そんなハンデなんて与えないで、ちゃっちゃとやっつけちゃってよ！

弁慶は背中に背負っていた道具の中から、三本の武器をハチマキに放り投げた。薙刀、三節棍、木刀が転がる。薙刀の先にある刃物は、太陽の光を鈍く反射させた。恐らく、あれば本物ではないだろうか？

ハチマキは一瞬薙刀を取ろうとしたが、木刀を選んだ。木刀と言っても一メートル五十センチはあるだろうか。十分に有利な武器になるだろう。また、三節棍や薙刀には扱いに技術がいるが、木刀なら子供の頃のちゃんばらの要領でなんとなく使えそうな気がする。そういう考えからの選択だったのではないだろうか。

俺は必至で抵抗した。ハチマキは時間を稼ぐためか自分から打って出る様子はない。

「ふむ、ではこちらから参ろうか」

弁慶はそう言うと、素早く間合いを詰め、ハチマキに迫った。ハチマキは後ろにのき、俺にまたくつつきそうになった。

おいおい、俺まで巻き添え食いたくないぞ！

俺はカエルに押され階段の一段目を降りた。

そこで弁慶はさらに間合いを詰め、ハチマキの腕を掴みかかった。もう限界とさとったのかハチマキは木刀を振り、弁慶の左腕を打った。

「ふん！」

しかしその木刀は強靱な弁慶の二の腕に押し返された。そして態勢を崩したハチマキの足を、弁慶は素早く足払いで薙ぎ払う。

「ぐああっ」

ハチマキは受け身もとれず地面に叩きつけられた。

あの体格、巨漢からは考えられないほど素早い。それどころか、あの得体の知れない荷物があるのに、見るからに重そうな荷物なのに、それを背負った状態でこれだけ強いとはもはや人間ではない。

「すごーい！ つおーい！」

ミユウちゃんも飛び跳ねて感激している。

俺を捕まえるカエルの力が弱まった。

「ちくしょう！ 仲間をよくもやってくれたな！」

意外と仲間思いなんだね。俺は思った。

カエルは無謀にも境内に戻り、すぐに薙刀をとった。そして刃先を弁慶に向け、「怪我するぜ」と威嚇した。弁慶は少しさがり、間合いをとった。

「ふむ、なかなか殺気だったいい目をしている。が、その目には殺意はない。それが己の弱さじゃ」

瞬間刃先の側面をパンと叩き、さっとカエルとの間合いを詰めた。左手はカエルの右手を棒ごと抑え込んだ。カエルは必死に振りほどこうとするが、体自体が金縛りにでもかかったかのように動かない。

「はっ！」

弁慶の大きな右掌がカエルの胸を強く打った。掌底が決まった。

カエルは薙刀を離し、一メートルは吹っ飛んだだろうか。そこで地面に仰向けになった。

「安心いたせ。手加減いたした。骨や内臓に異常はなかろう」

と妙に恐ろしいことを平気で弁慶は口にした。本当に、強い。

「あ、ありがとうございます！ この二人がずっと朝から俺たちを追ってたんです。助かりました！」

「ではそこの木にでも括りつけておこうか。放っておけばまた隼人殿を追ってこよう」

弁慶は背中荷物のロープを引っ張り出すと俺によこした。弁慶がカエルとハチマキを木に持っていき、俺はロープでぐるぐると二人を縛った。これで追ってはこれまい。

「くそう、ちくしょう。もうこれで俺たちは終わりだ。殺される。殺されるしかない」

カエルはそう言った。そして「もし助けてくれるなら、もうお前たちを追わない。そして、すべて話す。俺たちの組織のこと、お前たちが何者に狙われているか、その正体を！」といった。実に魅力的な申し出だったが、こちらには弁慶がいて、これからパンダマンと会い、その辺りの話は十分教えてもらえると思われる。カエルたちは嘘をつくかも知れない。こちらにある宝くじを隙をついて奪う算段かも知れない。

「へ、だまされるか！」

俺はそうやってあつかんべーをした。なんかまるで子供の喧嘩みたいだ。

「では参ろうか」

俺たちは泣き叫ぶカエルたちを無視して、境内を後にした。

階段を降り、車に向かおうと思ったら、弁慶は違う方へ歩き出した。

「あれ、車に乗らないんですか？」

「待ち合わせ場所まではそれほど遠くはない。歩いて向かおう。それに、それがしの体格では車が沈もうて」

はっはっは、と快活に笑った。

「いくらなんでも大丈夫じゃないですか。俺の車は仮にも五人乗りですよ」

「それがしが二人分として、この背中の荷物だけでもう一人分はあるぞ」

重量としてはぎりぎりだろうか。仮に大丈夫として、この巨漢が車にのったことを想像すると……なんかどこかおかしくなりそうな気がする。車が失調を起こしても不思議じゃない。

「そうですね。車はやめましょう。弁慶さんについていきます」

歩きはじめたところでミュウちゃんが弁慶に話しかけた。

「ねえねえ、人間一人分もその背中に武器を背負ってるの？」

「それは違うな。確かに相手と公平に戦う為に選ばせる武器は多いが、主にはそれがしの生活道具でござる」

「へえ、生活道具一式をまとめてたから時間がかかったのね」

「そうではござらん。この生活道具のほとんどが光線円盤でござる。さすがに全ては持ってこれなかったの、選別に時間がかかったわけござる」

ミュウちゃんは疑問符を顔に浮かべてじっくりこない様子だ。俺はなんとなく想像がついていた。

「光線円盤ってもしかして、レーザーディスクのことですか？」

「そうそう、それでござる。昔買い集めた名作傑作を置いて旅にはでられん。常に寝食を共にせんとな。ヒッチコックの『鳥』は泣く泣く置いてきたが、『ロープ』はここにあるぞ」

物凄い、無駄！ そんなもの全部置いてくればいいのに！

「レーザーディスクって一枚一枚が大きくて、結構な重量があったと思うんですけど」

「左様。武器以上の重さが光線円盤だけでもあると思うぞ。再生機もかなりの重さじゃ」

ミユウちゃんはようやく理解したようだ。

「昔のカラオケとかで使ってた、CDのおぼけみたいなヤツね！」

「そう。おもに映像磁器帯に変わる媒体として、総天然色の活劇を記録したものが一般に向けて販売されておった。それがしは名作が発売されると、その鮮明な映像に心を打たれ、買い漁ったものでござる」

しみじみと語ったが、頭の中で言葉を変換しながら聞かないと、イマイチ意味が分からなくなりそうだ。きっとミユウちゃんは異国語を聞いている感じだろうな。

「映像磁器帯は、ビデオテープのことで、総天然色の活劇というのはカラームービーということでよいでしょうか」

「それ以外には解釈しようがなかろうぞ」

いや、言葉自体が意味不明なのですよ、弁慶さん。しかも横文字を強引に避けている感がありありと感じられる。映像磁器帯というのはかなり無理やりな言葉の置き換えだ。

「弁慶さんってよっぽど映画が好きなのねえ」

「三度の飯の次に好きぞ。娘よ、サモハンとジャッキー・チェンが実は年齢が二つ違いなの、知っておるか？」

「ええ！ しらなーい！ そうなんだ、ビックリだよ！」

どんなトリビアで驚いてるんだよ。

「はっはっは。ジャッキーの方が俄然若くみえるが、意外と同年代なのでござる」

少し前の緊迫した雰囲気は嘘のようだ。弁慶は確かに強いが、敵が襲ってくることに對してまったく恐怖がないのだろうか。

それより、なぜ敵と戦うのに相手に武器を与えたのだろう。勝てるといってもリスクは伴う。絶対に勝てる、というレベルから、まあまず負けないというレベルまで下げる必要はないはずだ。

「ところで弁慶さん、どうして先ほどの戦いで、相手に武器を選ばせたんですか？ 敵なんだから確実にやっつけければいい。それには別にハンデは必要ないと思いますが」

弁慶の表情が急にきりっと引きしまった。

「勝負は公平に行うべきであると、それがしは考える。それがしは手前みそながら日々の鍛錬により心と体を鍛えており、常人よりも屈強な身体を得ておる。力が圧倒的に強い者が、明らかに弱い者を倒す、それはただの虐待でござる。戦とはいえ、虐待は心の弱いものが行う非道。外道にもとる。それがしが望む勝負とは、心と心の強さによる勝負。精神の屈強さはこの世に生を受け、いかに修業をしてきたかで大きく差が出るもの。これは個人の努力の差でござる。体格の差は個人ではどうしようもない部分があるが、精神の修行では平等。さればこそ肉体による能力の差は武器などで埋めれば公平。そうすればあとは精神と精神の勝負。より崇高な精神で、強い心を持った者が勝利するはずぞ。よって、それがしはカワズ殿たちに得物を選ばせたのでござるよ」

「精神の強い者が、勝負に勝つ。精神を鍛えている者ほど、強いという考え方ですね。なんか戦

いの美学を感じます」

「弁慶さん、カッコいい！」

ミユウちゃんの言葉に、俺は少なからず嫉妬した。きっと俺の精神は、かなり弱い。

県道に出て少し歩道を歩いたところで、また見覚えのある男が現れた。電車で会った男、タコヤキだ。

「おっ、また会ったな、あんた。あんたが宝くじ持ってるあんちゃんだろ。さっきはよくも法螺かましてくれたな。こっちも嬢ちゃん連れてたんで気付かなかったよ」

ぎろっと大きな目で俺を睨み、腰に差していた長い鉄の箸を両手に抜いた。俺は恐怖を感じた。カエルたちとは漂う雰囲気も、人間としての危なさも全く違う。カエルたちが偽物のチンピラだとしたら、タコヤキは本物のチンピラだ。殺される、そんな気がした。

「さあ、物を寄こしな。かわいい嬢ちゃんも巻き添え食って怪我するぜ」

弁慶がさっと前に出た。

「隼人殿は下がっておられよ。ここはそれがしの出番でござる」

弁慶はぎろりとタコヤキを睨むと、大音声で相手を威圧した。

「それがしは弁慶と申す。隼人殿に危害を加えよう者はそれがしの敵。文句があるなら、それがしが相手する」

タコヤキは何かの武道をやっているのか、中国拳法を連想する構えをとった。

「あんちゃんはクズだな。関係ねえ人間次々巻き込みやって、弁慶か、怪我してからじゃおせえからな」

しばし睨みあいが続いた。恐らく隙があれば弁慶はすぐに間合いを詰め、やっつけるだろう。タコヤキは隙がないのだ。

と、そこでタコヤキが仕掛けた。風に乗ってタコヤキの匂いがほんのり漂ってきた。

弁慶は素早く鉄の箸を交わす。が、掴めない。タコヤキの攻撃をしかけて引くスピードが速いのだ。弁慶の突き、蹴りをタコヤキは受け、かわす。常人ならば受けるだけでも相当なダメージのはず。ましてやあのスピードをかわすなんて考えられない。

タコヤキはにやりと笑った。

瞬間その顔に弁慶の鉄拳がめり込んだ。タコヤキが吹っ飛ぶ。受け身もとれずに地面に仰向けになった。

「ちょっとやりすぎたかの」

タコヤキは鼻が潰れたかも知れない、仰向けだが溢れる鼻血がドクドクと顔を覆う。タコヤキは気の毒にも気を失っていた。

「迷惑だから道のはしに寄せとこう」

ミユウちゃんは「はやく、はやく」と俺にそれをやらせようとする。俺はこわごととタコヤキに触れると、ぐいっと道のはしに寄せた。影になっているのでほっといても死にはしないだろう。

「さ、先を急ぐでござる」

弁慶は歩き出した。俺たちもそれに続いた。

しかしさっきのタコヤキ、どうしてにやりと笑ったのだろうか？ 俺は弁慶に聞いてみた。

「それは敵わぬと悟ったからでござろう」

「でも弁慶さんの攻撃をしっかり受けたりかわしたり、対等に戦ってるように見えたけど」

「打撃は打つ方も受ける方も痛いもの。あやつもかなりの修行者でござったが、それがしの攻撃に耐え続ける精神はなかったのでござる。久々に手応えのある相手だった」

「へえ、だから武器を渡さなかったの？」

弁慶は肯いた。

「手前の得物を持っていたこともあるが、それがしが用意する必要がないほどの手練だとすぐに見抜いた。しかし背の荷物を置いて戦うほどの相手ではないと判断した」

確かにレーザーディスクは背負ったままだった。それが弁慶の余裕だ。これだけ強ければ、やぐざが出てきても負ける気がしない。

「本当に弁慶さんって強くてカッコいいね！」

ミユウちゃんは言った。俺はその言葉に嫉妬する感情を抑えることができなかった。やはり俺の精神は、かなり弱い。

「さて、そろそろ公園でござる。この公園でパンダマン殿は待っているはずじゃ」

公園にはちやちな遊具が数個置いてあった。あまり利用されていないのだろう、雑草の手入れも雑で、足首が隠れるほど生えていた。

あとがき？ 次回予告？ ひとりごと？

大変お待たせしました。

しろあです。

仕事で忙しかったのと、ラストスパート、書ききりたかったのと、
ファイナルファンタジーXIII-2 をクリアしてたのとで更新が遅くなりました。
もう本編が書き上がったので、今後はすこすこ更新していきたいと思います。

ここまではナンセンスなお話でしたが、次回からは物語の謎がようやく解き明かされていきます。

ギャグの応酬はまあまあ維持しつつ、シリアスな場面も多々出てきて、
最後にはなぜか感動までしてしまうお話に仕上がってます。

こんなバカ小説のどこが感動につながるのか?! まったく想像つかないでしょ(笑)。

いよいよパンダマンとご対面。はたしてパンダマンの真の目的とは一体なんでしょう？
タコヤキ、カエル、ハチマキは何者？ ミユウちゃんはハヤトをどこまで振り続ける?!

次回は10月末には更新予定です。ハバナイスハロウィーン。